

ネイチャー高知

No.55 2020年7月29日発行

講演会・定例総会を開催しました

2020年度の講演会と定例総会を2020年2月23日10時からこうち男女共同参画センターソーレ視聴覚室で開催しました。

10時から開催された講演会は、モニタリングサイト1000里地調査（チョウ類）からみた重倉地区の自然と題して、株式会社相愛の近藤英文さんから講演をいただきました。近藤さんは高知市重倉地区において2013-2019年の間に環境省モニタリングサイト1000里地調査チョウ類調査として、次の方法で調査を行いました。

- ・ 調査ルートは複数の景観タイプ（水田・畑・森林など）が含まれるように設定
- ・ 調査は4-11月に、月2回の頻度で、晴天・無風あるいは微風の日10-15時の間実施
- ・ 調査ルート内を約時速2kmで歩き、左右・前方・上方の5mの範囲で確認されたチョウの種名と個体数を記録

調査の結果5科55種のチョウが記録されており、今回の講演会ではイチモンジセセリ、ツマグロヒョウモン、モンシロチョウなど代表的な種について7年間の出現状況の推移の報告とその要因についての考察が紹介されました。発表の後、個体数の変動と気温との相関関係の有無、イチモンジセセリの減少要因などについて出席者との活発な意見交換もあり、有意義な講演会になりました。

講演会の後定例総会を開催し、2019年度の活動報告、会計報告、2020年度の活動計画、予算、役員改選について議事を行い、提案どおり承認・可決されました。

2020-2021年度の役員は次のとおりです。

顧問 澤良木庄一 会長 稲垣典年
副会長 細川公子 代表世話人 坂本彰
世話人 笹岡宗生 田城光子 西村公志 松本孝
三本健二 山崎三郎 田邊由紀（新任）
会計 橋本淳 監事 高橋啓



2020年の観察会の予定は次のとおりです

1月5日 春の七草観察会

3月21日 スミレ観察会

4月5日 鏡川 川の生きもの観察会

4月25日 草原の植物観察会（※5月5日に延期したのちコロナウイルス対応で中止）

9月初旬 秋の草原の植物観察会

10月 棚田の植物観察会 アサギマダラ観察会

11月 蛇紋岩地の植物観察会

その他石灰岩地の植物観察会の新設（秋）、野鳥の会の高知城観察会（毎月第2日曜日）

前回お伝えした四万十市森沢で発生しているアオモジの集団枯死は、その後もどんどん拡大している。各方面にお願いし、やっと原因調査をしてくださる方が見つかったが、その直後に新型コロナウイルスの感染拡大により緊急事態宣言が出され、現地調査ができなくなって現在に至っている。

この場所にアオモジが大群生していることに気づいたのは、2016年であった。周囲はほとんどがスギ、ヒノキの人工林になっているが、北西向きの斜面だけに植林されていない二次林が残っていた。入り口にある太陽光発電の所有、管理者への聞き取りでわかったのは、2014年に太陽光発電を設置するためこの二次林を全て伐採し、2015年に設置が完了したということだった。そして伐採から約2年後、遠くからも目を引くほどのアオモジの純林が形成された。アオモジは雄花を切り花に、材は楊枝の材料として、果実からは香料がとれるなどさまざまな利用価値があるが、所有者からはそのような利用目的で栽培しているという話はなく、伐採後に自然発生したものである。四万十川下流域では、あちこちでアオモジの生育をみるが、最近特に分布範囲が広がってきている。種子が野鳥によって散布されていくのだろう。それにしても膨大な量の種子を散布したものだ、と感心する。長年にわたって散布されたものが休眠していて、伐採後いっせいに芽生えたのかもしれない。アオモジの果実の大きさは、多くの野鳥の食べやすいサイズなのだろう。果実は赤から黒へと、熟する過程で変化していく。その色は鳥たちにとってよく目につく色なのだろう。どれだけたくさんの種類の野鳥が、あるいは個体数の鳥たちが、この樹木の子孫を残すためにかかわっているのか。発芽率もよいのだろう。さまざまな興味がわいてくる。

ところが、そのアオモジの山に2019年 異変が起きた。稜線上に枯れ木が見えるようになったのである。はじめは山の稜線上、人工林との境界付近だけであった。しかし、その後、次第に枯れ木は増えていき、1年の間にそれは数倍にも広がって、現在も進行中である。これまでは、ほぼ同時期に発芽し成長してきたと考えられる個体が密集して生えている場所で、隣の個体にまるで感染していくように思える枯れ方で山の斜面を下に向かってくだっていた。他の樹木と混生している場所には、枯れ木は見られなかった。しかしつい最近、集団枯死とは離れた場所にも、枯れ木が点々と見られるようになったことに気がついた。あたかも新型コロナウイルスが世界中に感染を拡大し調査が中断された今、アオモジの集団枯死には、科学的根拠がない全くの素人のおもいつきだが、このウイルスからヒントになるものが見つかりはしないか？共通点はないか？など、枯れていく山を遠目に見ながらいろいろ思いをめぐらす日が続いている。

黄色いスミシ

細川 公子

スミシの花色は？と質問されると、“ヴァイオレット”（洋種のニオイスミシを指す）の名前から、大部分の人は紫系の花をイメージするのではないのでしょうか。確かに、西日本に分布する



キバナノコマノツメ



キスミレ

スミシは、身近なタチツボスミシの仲間やスミシ、シハイスミシなどのように紫系や淡紅色が最も多くみられます。それに次いで白花ですが、ニオイスミシ、フモトスミシのように結構種類は多くても、全体的に花が小さく印象が薄いようです。さらに、“黄色のスミシ”となると、特にスミシに興味があれば「見たこともない」が当たり前でしょう。

黄色のスミシは北海道や東日本の日本海側、高山が分布の中心です。高知県ではキバナノコマノツメとキスミシの2種が分布しています。キバナノコマノツメは北半球の冷温帯に最も広く分布しているスミシですが、西日本では四国山地の岩場と屋久島だけに限られています。キスミシは山梨県以西に分布し、分布の中心は富士山周辺及び九州の阿蘇山、由布岳を含む火山帯の草原です。九州では、昔からの野焼きによる人為的な山地草原を生活の場にして大繁栄しているのです。春、黒い山肌を黄色に染めて咲く

キスミシは圧巻です。その一方、西日本の隔離的に分布している場所では、個体数が少なく、希少種ゆえに盗掘され絶滅の危機に瀕しています。高知県の自生地でもかなり危うい状態で、私も数年前、写真に収めたまさにその株は数日後、掘り跡を残してすっかり姿を消していました。四国では貴重な黄色いスミシ。絶滅させることなく護っていききたいものです。



エゾタカネスミレ（大雪山）



キスミレ（由布岳周辺の草原）

きままなカメラ日記

久川 信子

皆様、はじめまして！久川信子と申します。この度、突然の連載執筆のお話をいただいて…正直、『えーっ！なんで私！』とビックリしてお断りするべきではないかと思いましたが、アホな内容で良いということなので、宜しければ一文お付き合いお願いいたします。

私は大阪生まれの大阪育ちで 26 歳の時に、高知に居住して我が子と共にこちらの自然豊かなフィールドでの楽しみ方を知りました。初めての川遊びでは、子どもを連れて今では考えられない短パンビキニ姿で通い、高知では「顔面」と呼ばれている水中メガネで鯉を見た時にはまるでジョーズを見たかの如く腰をぬかしました。山には子どもが欲しがるカブトムシやクワガタ採集にお風呂上がりこれまた短パン姿で行き…結果、両足で 100 カ所くらい蚊に刺される苦い思い出もあります。

そのような川や山での遊びも、子ども達の成長と共に遠退くこととなります。その後はパソコン関係の仕事をするようになり、完全にインドアでした。それが 38 歳から、のいち動物公園で働くようになり 40 歳で生まれて初めてホテルを見て感動♪♪そこから休日は探検気分カメラ片手に行き回るように…アウトドア最高！！が再燃し、自然観察が一生楽しめる趣味となりました。皆さんが子どもの頃に経験しているようなことを私は今！一気に経験しています。そんなド素人が感動したネタの写真日記です。それでは！



3月18日

春の渡りのホウロクシギが20羽飛来しました。目撃情報をもとに検証した結果、滞在時間は4時間。初めは11羽でしたが、私が発見した時には16羽。先頭のリーダーは中洲で羽を休めている間も周りを見渡しています。リーダーの合図で16羽が飛び始めたその先には、遅れて到着した4羽が。そのまま一群は海沿いを南国方面に飛び去っていきました。渡りのホウロクシギに仲間を思う気持ちを感じて感動しちゃったのでした。



6月20日

さあ！今年も横倉山の光るキノコ「ギンガダケ」！緑に発光する集合体にピッタリな種名です。今年はヒメボタルとのコラボショットが撮影できました。このギンガダケ、本土ではここだけで、離島では八丈島と屋久島でしか発見されていません。ヒメボタルと撮影できるのは世界にここだけとか…

ここは滑りやすい地質の急斜面にあり、夜になると真っ暗闇です。藪蚊が沢山いるので、虫よけネットを着ます。20代の頃と違い成長しました。あ！おばちゃんやん！って言いたくなりました？おばちゃん×女性○ですからね。これ大事です(笑) さて、もう一つ大事なことがあります。夕方には猛烈な数の藪蚊も午後8時を過ぎるとピッタっといけません。活動時間があるんだと新しい気付きに感動しちゃったのです♪

今回はこのあたりで…最後までお付き合いいただきありがとうございました、(^o^)

撮っておきの一枚



ライラックタンポポ

今年は西日本タンポポ調査が実施され、タンポポに興味を持った私は緑花タンポポ、薄白や管咲きカントウタンポポ、中国シロバナタンポポ、緋紅輪タンポポなどを栽培するようになりました。

画像のタンポポは新疆ウイグル自治区の海拔 3000 から 3800m の高山に自生しているピンク咲きのタンポポ *Araxacum lilacinum* です。

花は唯一無二で、ピンク咲きのタンポポの中では屈指の美しさを誇ります。

山岡 重隆

※lilacinus (ラテン語) ライラック色の 藤色の 淡堇紫色の

撮っておきの一枚コーナーへの投稿をお待ちしています

栽培中の植物や野生動植物、風景写真など、会員の皆様のお気に入りの写真を短いコメントと一緒に送ってください。

送り先はパソコンの場合は s-akira@mvd.biglobe.ne.jp

スマートフォンからは sakamotosanrei@docomo.ne.jp

希少な写真だけでなく、身近で感じた自然の姿を写し撮って送ってください。

「へーえ」と驚いた話 古仁淀川

坂本 彰

ここ 20 年近くおもに植物の調査を目的に県内あちこちを歩いている。県内あちこちといっても自前の交通用具は原動機付自転車しかないので、自宅から片道 40km 程の範囲がほとんどである。植物をいろいろ調べているなかで、地形や地質についての「なんで??」と思われる事象に行き当たることがある。きちんと勉強すればよいのだが、今のテーマである植物についてさえ勤勉とは言えない状況で、ずっと後回しになっている。そんな中で、植物に関して調べていくなかで偶然に見つけた文献から「へーえ、そうだったのか!!」ということになった。

第一の疑問 高知市朝倉城山（じょやま）の玉石

高知市の西部朝倉にある城山は標高が 100m を少し超す小山で、自宅から 30 分ほどの距離にある。散歩コースの一つになっているが、頂上に至るルートはたくさんあり、季節や気分によっていろいろと選択できるのも楽しい。特にこれといった植物はないが、タツナミソウやイガタツナミといった丘陵地の植物は楽しめる。最近ではコジキイチゴが見つかった。

城山には、本山梅溪が築いたとされる朝倉城跡があり、頂上周辺には土塁、空堀、竪堀、堀切といった防御用の構造物がはっきりと見て取ることができる。これらの構造物を見ると、城が戦のための施設であることが良く理解できる。ところどころに玉石を使った石垣が築かれており当初は材料を鏡川から運んだものだろうと想像していた。しかしながら周辺を含めて何度も歩くうちに、石垣用の石は鏡川から運んだものでなくてその場にあったものを利用しているに違いないと考えるようになった。朝倉城跡の南側一帯は丘陵地となっており、県の農業技術センター果樹試験場があるが、その圃場の石垣ももともとそこにあった石を利用していると考えられた。朝倉城跡や果樹試験場の石垣に使われている石の大きさは、人の頭ほどのサイズが多く、近くの鏡川で見かける石に比べるとかなり大きい。これらの石はどこから運ばれてきたのだろうか？



朝倉城山周辺で見られる石垣 左から朝倉城跡、城跡西方の芋畑、果樹試験場

第二の疑問 柳瀬川下流端近くの広大な水田地帯

柳瀬川は佐川町古畑から佐川盆地を南から北へ抜け、越知町の紫房（しぼう）で仁淀川と合流する。合流点付近から上流の仁淀川の左岸・右岸には越知の平野が広がっている。合流点付近の越知町の部分は仁淀川が運んできた堆積物による平地と考えられるが、仁淀川から 2km ほど離れた佐川町の黒原地区にも柳瀬川の両岸に広々とした水田



佐川町黒原地区に広がる水田地帯

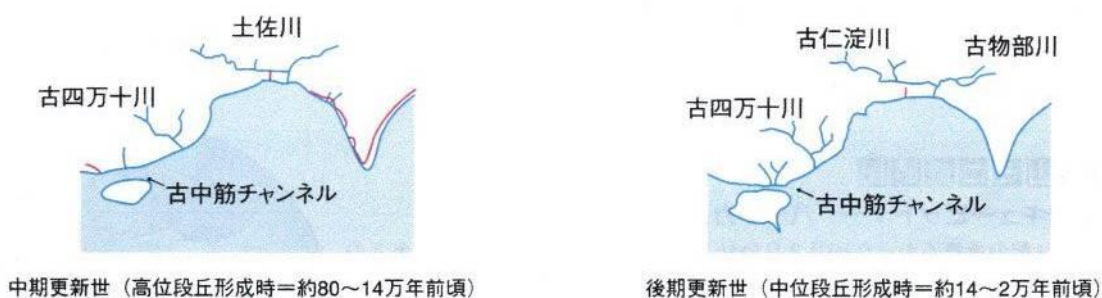
が広がっている。柳瀬川は延長 20km 足らずの小さい河川で、その流域にこのような平地ができるとは納得しがたい。大昔、仁淀川が入り込んできていたのではないだろうか？ここには希少植物のコイヌガラシが生育しているが、この植物は物部川流域では、かつて氾濫原であったと思われる場所によくみられる植物である。

古仁淀川

以上二つの疑問が一気に解ける文献に行き当たったのは全くの偶然であった。越知町出身の織田千歳という植物研究者のことを調べていて、越知町立自然の森博物館ニュース「不思議の森から」にたどり着いた。織田千歳に関する文献 2 編を読んだついでにバックナンバーをめくっていると「仁淀川の過去と現在」という記事が目にとまった。著者は元高知大学理学部の満塩大光教授、そこからさらに検索を進めて 2001 年 12 月 8 日に発行された高知大学黒潮圏研究所所報に掲載された「高知県における第四紀の環境変化」という論文にたどり着いた。

現在の仁淀川は越知町の柳瀬川との合流点近くから大きく北に曲がっているが、満塩教授の「仁淀川の過去と現在」によれば、80-14 万年前には越知町越知の小船峠あたりを越して東に流れ、いの町の JR 鉄橋からさらに東進し、高知市朝倉付近を経て今の鏡川に流れ込んでいたと考えられるとのことである。城山付近で見られる地層は「城山層（じょやまそう）」と呼ばれる地層で古仁淀川が朝倉付近を東に流れていたことを示す重要な証拠とのことである。驚いたことに仁淀川はさらに東進し物部川と合流したのち、現在の南国市の後川付近で土佐湾に流出していたと考えられ、この仁淀川と物部川とが合流した巨大河川（古土佐川）が植物分布のバリアとなったとのことである。シオギクとノシギクの分布の境界が現在の物部川になっている原因を古土佐川の存在で説明している。

私は地学についてはほとんど知識がないが、遠い昔、仁淀川が越知、佐川を経て、西佐川から現在の土讃線沿いを東に流れ、高知市を通り過ぎて南国市まで至っていたという説は、疑問を持った二つの点の答えとして納得できそうである。日下川や今はなくなってしまったが宇治川流域の湿地の存在も古仁淀川と関連するのであろうか。



土佐湾周辺の高位段丘形成時から中位段丘形成時の古地理図

(仁淀川の過去と現在 -仁淀川はどのようにしてできたか- その2 から引用)

引用・参考文献

- 満塩大光 2001 高知県における第四紀の環境変化 高知大学黒潮圏研究所所報
満塩大光 2008 仁淀川の過去と現在 -仁淀川はどのようにしてできたか-その1 不思議の森から Vol.18
満塩大光 2008 仁淀川の過去と現在 -仁淀川はどのようにしてできたか-その2 不思議の森から Vol.19

観察会のお知らせ

初秋の草原の植物観察会

恒例の皿ヶ峰観察会です。観察会の主役はホソバヒメトラノオですが、この時期はイガクサ、キンバイザサ、コキンバイザサ、ヒキヨモギ、ヒメノハギなど草原生の植物を数多く観察することができます。

日時 2020年9月5日(土曜日) 午前9時から

場所 高知市皿ヶ峰周辺 9時に筆山第2駐車場(皿ヶ峰入口)に集合

講師 稲垣典年さん

持ってくるもの メモ用具 あれば図鑑

その他 雨天中止です

参加希望者は事前の申し込みをお願いいたします。

申込先 高知県自然観察指導員連絡会 坂本彰

TEL&FAX088-850-0102 Mail s-akira@mvd.biglobe.ne.jp

編集後記

長かった今年の梅雨もようやく明けそうです(29日12時現在梅雨明けの発表はありません)。

新型コロナウイルスの影響で様々な活動が消極的になっているように感じます。そのような中で今号から久川信子さんが新しく連載記事を投稿してくださるようになりました。「おくての自然観察ガール」のように拝察しましたが、積極的に活動されている様子で、今後が楽しみです。

山岡さんからはピンク色のタンポポの写真を投稿いただきました。タンポポのことは少し勉強しているつもりでしたが、こんな色のタンポポがあるとは驚きです。世界は広いですね。残念なことにプリンターが旧式のもので、印刷物では微妙な色が発現出来ていません。悪しからずご了承ください。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

No. 55 2020年7月29日発行

事務局 780-8075

高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail s-akira@mvd.biglobe.ne.jp